

第三部 言葉の時間形態～想起・約束・現在～

A. 想起としての説教

B. 約束としての説教

C. 現臨者の説教

17章 現臨の多様性

【主題】

想起せられた方（A）、そして約束されておられる方（B）は、さまざまな仕方で現臨される。いずれの仕方で現臨も彼の現臨にほかならず、彼の現臨として語らねばならない。だが、いずれも多くのものの中のひとつの現臨の姿でしかない。

18章 つなぐことととくこと

【主題】

来たりつつある救い手であり審判者である方にふさわしい言葉とは、自分が語ることを実行する言葉、すなわち、つなぎ、また解く言葉である。来たりつつある方の現臨を説教するということは、悪魔を追いはらうということであり、救いを求めて呼ぶことなのである。

※どうして、「つなぐことととくこと」が「C. 現臨者の説教」でテーマとなり、論述されるのか？

—現臨者が救い手であり審判者である方（つなぎとく方）であり、その方の現臨が説教で起こるから。

第17章 現臨の多様性 I 節 前提・霊の現臨 p

霊の現臨の中で、信仰は「見ることを学ぶ」（第27章Ⅱ節¹⁾）

「見る」ということの中で、キリストによって引き起こされる一種の神律的相互作用が起こる。つまり、ご自身について語られること（説教）によって現臨し、御自身を臨在せしめる。

¹ 第27章「聴衆への道」第Ⅱ節「見るということ」

第I節 説教の標準語（厳かな言葉）

標準語(Hochsprache)

P540 に現れる言葉。（高みにある言葉、厳かな言葉をも意味していると思われる）訳注 80

Hochsprache というのは、標準語を意味する。方言とは違う、文章用、もしくは舞台用語としてのドイツ語でもある。高地ドイツ語などと訳されるように、低地、即ち北部ドイツ語との対比で用いられることもある。しかしここでは、それだけでなく、日常の方言でなされる言葉とは区別された、改まった、いささかいかめしい言葉のここのようである。そこで、一応、「**厳かな言葉**」と訳した。これは、日常、方言を語るのが、どこでも殆ど通例のことであり、標準語はそれほど日常化していないドイツでこそ言い得る表現。そういう意味で、「高い hoch 言葉」と著者は言う。

㊦ 「あなたの罪はゆるされた！」

—「わたしはあなたの罪を赦す Ego te absolve!²」

- この文章を語ることにより、説教者は聴衆と自分の救いを賭ける。御名をもって呼ばれる方が働かれる事こそ、一切の説教行為の目標であり、この短い言葉に福音主義的説教の福音的なものが凝縮。…つまり、説教する者は、つなぎ、また解く。説教者には、「説教者は究極的なことを語っている」という約束が与えられているが、この「究極的なこと」は、説教者の外から与えられるもの。



「つなぎまた解くこと」について、「とくこと」つまり「罪のゆるし（赦免:Abusolution）」に集中して語る。この「赦免」ということの中に、聴衆にとっての福音が集中しているから（第21章第II節二項³）。福音そのものが罪のゆるしとして示される。

² 訳注 79 告解における赦免(abusolutio)の言葉であることは、本文でも、後述で改めて指摘した通り。この第18章全体で問題にされる罪の赦しの具体的な場所として、福音主義教会においても、告解の意味が真剣に問われたことを、日本の説教者もまた新たに自覚すべきであると思う。

³ 第21章 黙想について 第II節 黙想の実践のための諸帰結 二項 罪の赦しについての喜び

80 罪の赦しの説教について

- ルター「福音は罪のゆるし以外の何ものでもない」
 - ☆ 「罪のゆるしは福音の説教以外の何ものでもない」
- ヨハン・クリストフ・ブルームハルト
「鍵の職務」について、教会の教え、説教は曖昧であるので、全面的解明が必要。



80 「鍵の職務」という教えの「全面的解明」

- 根拠となるテキスト
 - (1) ペテロに与えられた主イエスの言葉
「わたしはあなたに天国の鍵を授けよう。そして、あなたが地上でつなぐことは、天でもつながれ、あなたが地上で解くことは天でも解かれるであろう」
(マタイ 16・19)。
 - (2) これに相応する弟子たちに与えられた
「つなぐことと解くこと」についての言葉
イエスの名によって集まった者たちの中にイエスがいてくださる、との現臨の約束。(マタイ 18・19以下)。
 - (3) ヨハネ福音書では、聖霊を与えられた後、約束された。
「あなたがたが許す罪は、だれの罪でも許され、あなたがたが許さずにおく罪は、そのまま残るであろう」(ヨハネ福音書 20・23)。



聖書テキストから、鍵の職務についての様々な理解が生まれるので、鍵の職務の様々な機能を取り出す作業をしてから、共通の分母を見いだす努力が必要。

80 説教を罪の赦しそのものと同定できるのか？

- ① 十字架上のイエスが、全ての人に及ぶ恩赦、すべての人の罪の赦しを獲得された、つまり、罪のあらゆる認識に先行する赦免が行なわれている、ということ。
- ② 説教というのは、教義学がするような一般的な仕方で、罪の赦しを説明するわけではなく、寧ろ、罪のゆるしそのものを語りかけねばならないということだ。

㊦ 説教において起こる罪の赦しとは？

説教において罪の赦しを語りかけることの中で、わたしやわたしの聴衆の過去と将来に対して、キリストとその現臨が、その正当性を獲得し確保する。

罪の赦しは、私たちの過去に対する霊の現臨を正当なものとする。悪しき時から私を連れ出し、新しい時の中においてくれる。罪の赦しを受けとった時、私たちの過去は正当な意味を持つようになり、そのことによって、過去は過去となり、私の「今」が変えられる。

そこでは、罪人が十字架と対面する出来事が起こる。霊によって十字架の出来事が想起され、その十字架の出来事が現実の現実に現在のものとなり、また、その過去ともなる。

同時に、霊は将来をも先取する。霊において説教で語られる赦免の言葉は、来りつつあるキリストの言葉として語られる。来たりつつあるキリストの言葉により将来を先取りし、将来が与えられることで、罪人の過去は消滅させられる。こうして、説教の最高の形態として、罪の赦しが起こる。罪の赦しの中に、想起と約束が凝縮している。

→

- 説教に起こる罪の赦しは、「祭りの儀式」という特質を持つ。罪の赦しを祝う祭り。説教にとって正当な祭りの儀式は、説教者が罪の赦しを自分自身の実存によって証言することにより、説教の内容となっておられるお方が、御自身の現臨をもってこれを満たしてくださるので、空しく虚ろな者にはなり得ないようなもの。

80 罪の赦免を語る説教の言葉と語り方

➤ オイゲン・ローゼンシュトック・ヒュッシー⁴

「その真実の頂点にとどまる言葉は、常に厳粛なものである。高度の真理は標準語⁵(高みにある言葉、厳かな言葉をも意味していると思われる)で、声高く語らねばならない。日常の会話や、教師と生徒との間の対話の、おしゃべりに落ちることはがまんでできない(『言語の冒険に帰ろう』より)。この言葉が、説教者に理解されれば、御名の栄光を損なうような独善的で飾り立てた言葉を語らぬよう守ってくれるだろう。

➤ 説教の内容となっておられる方御自身が、「あなたの罪は赦された」という言葉に、御自身の持つ永遠性の重みを分け与てくださるからこそ、一種の重々しい語り方が要求される。

➤ 真実の熱情は、自分が語ることをよく弁えており、「滑り落ちていく言葉」に約束として与えられているものについての知識をもって、滑り止めとする。

➤ 語り方はその言葉にふさわしくあるべきであり、語り手は自分が語っていることが何かをよく考え、語り方の高さを保ち、祭りの儀式にふさわしく、厳かに語る。罪の赦しの事柄に即してふさわしい語り方。

➤ 厳かな言葉が、その値打ちを保つのは、適用においてつつましく、事柄に即して使用され、必要不可欠なことにのみ限定

⁴ オイゲン・ローゼンシュトック・ヒュッシー 1888年、ベルリンの裕福なユダヤ人家庭に生まれる。十代でキリスト教に改宗。ハイデルベルク大学で法学を学び、1912年よりライプツィヒ大学私講師。第一次世界大戦に従軍したのち、ダイムラー・モトローレン社に就職。このころ、フランツ・ローゼンツヴァイクらと親交を結び、1919年には出版社パトモスを設立、雑誌『被造物』を刊行。1921年、フランクフルトで労働アカデミーを設立し成人教育事業に取り組む。1923年よりブレスラウ大学ドイツ法教授。1933年、ヒトラーが政権を掌握するとアメリカに亡命。ハーバード大学を経て1935年よりダートマス・カレッジ社会哲学教授。引退後も同地に留まり、1973年死去。著書に『ヨーロッパの革命』、『社会学』、『人類の言語』などがある。

⁵ Hochsprache というのは、標準語を意味する。方言とは違う、文章用、もしくは舞台用語としてのドイツ語でもある。高地ドイツ語などと訳されるように、低地、即ち北部ドイツ語との対比で用いられることもある。しかしここでは、それだけでなく、日常の方言でなされる言葉とは区別された、改まった、いささかいかめしい言葉のこのようである。そこで、一応、「厳かな言葉」と訳した。これは、日常、方言を語るのが、どこでも殆ど通例のことであり、標準語はそれほど日常化していないドイツでこそ言い得る表現。そういう意味で、「高い hoch 言葉」と著者は言う。

されて、異例な言葉であり続けるときのみ。この異例なものがあたりまえのことになれば、説教の厳かな言葉は、説教壇通例の熱弁となり、壮大な言葉の使用過多となり、余計な文章、空虚な形式的教えへと転化する。

㊦ 「厳かな言葉」の問題性

- ① 説教においては、「つなぎ、解くこと」が、直接に、神の御名によっておこなねばならない。ただ、文学を参照することで、厳かな言葉を軽率に扱うことを免れる。このように、この「厳かな言葉」は、それを語る者には、「困難な言葉」なのだ（問題①）。
- ② 説教が語る厳かな言葉とは、テキストに関係がある。テキストを語ることによって、そうした厳かな言葉となる。しかし、語るのは、わたしでなくてはならない。わたしが誰かを解く定まった言葉が、わたしをみ言葉と聴衆に結びつける。そうした定まった言葉とテキストを自ら保証し、責任を負わねばならない（問題②）。

(3/10 はここまで)

㊦ 「厳かな言葉」の基となるもの

- この厳かな言葉を失えば、説教者は言葉を失う。この「厳かな言葉」が沈黙すれば、まさしく“ちんぷんかんぷん”な言葉だけが語られることになる（第2章 困惑 第I節 神との関わりで知る困難 参照）。
- このような言語喪失は、使命の喪失を示す。厳かな言葉は、その使命に依存し、その調子の高さは、使命を与えてくださるお方の高さに依存。「厳かな言葉」は、使命として与えられた言葉。その使命が、語り手をみ言葉に仕える者とする。
- このような言葉は、上から下へと向かって語りかけるものではなく、寧ろ、自らが深みにあって学び取らねばならないもの。第三イザヤの言葉「いと高く、いと上なる者、とこしえに住む者、その名を聖となえられる者がこう言われる、『わた

しは高く、聖なる所に住み、また心砕けて、へりくだる者と共に住み、へりくだる者の霊をいかし、砕ける者の心を生かす』
(イザヤ書 57・15)。

- この厳かな言葉は、心砕けて、へりくだる者の言葉として規定しうる。 そうであるなら、異例のものを当たり前のものですることなく、言葉多きことを大切にすることはないだろう(第21章Ⅲ節参照⁶)。この厳かな[高き]言葉の語り手の特質は、謙遜に他ならない。

「我々が入手しうる唯一の知恵は、謙遜の知恵。謙遜であることに終わりはない」(T.S. エリオット⁷)。

(結論)

厳かな言葉を語るためにへりくだり、
心砕かれる者は、
霊の内在ゆえに語りうるようになる。
その言葉は、いと高き方が現臨くださるがゆえに、その高さを保つ。
この厳かな言葉とは、高く挙げられた方の霊によって靈感を受けた言葉、へりくだり、心砕かれた者の言葉。

⁶ 第21章 黙想について Ⅲ節 現代の芸術と黙想

⁷ T.S. エリオット (トーマス・スターンズ・エリオット 英: Thomas Stearns Eliot、1888年9月26日 - 1965年1月4日) は、アメリカ合衆国出身のイギリスの詩人・文芸批評家。

5部からなる長詩『荒地』や詩劇『寺院の殺人』によって20世紀前半の英語圏で最も重要な詩人の1人と評されるほか、創作における歴史的伝統の意味を論じた「伝統と個人の才能」などの評論で批評家・保守派文人として欧米の文壇・言論に巨大な影響を残した。1948年、ノーベル文学賞受賞。

「あなたの罪が赦された」は新しい存在を語り、新しい世界を語る定式

罪の赦しによってもたらされる現在

「今は」、和解が成り(ローマ5・10⁸)、不従順な人々は、「今は」憐れみを受けた(ローマ11・30⁹)、かつての罪の奴隷たちは、「今は」自由とされ、従って神のしもべである(ローマ6・20～22¹⁰)。

「今は」キリストの血によって義とされており(ローマ5・9¹¹)、「今は」律法の軛から解放されている(ローマ7・6¹²)。

「こういうわけで、今やキリスト・イエスにある者は、罪に定められることはない」(ローマ8・1¹³)

—という「現在」が、教会の存在を規定する→

だから、「**あなたの罪は赦された**」という定式は、
このような教会が存在する新しき世界を語る定式のようなもの。

この新しい世界にあって、かつてアダムが動物に名付けたように、説教者は新しいアダム(キリスト・イエス)と共に新しき被造物に名付けることが許されている。つまり、説教は人間に対して、キリスト

⁸ ローマ書5・10 “なぜなら、わたしたちは皆、キリストの裁きの座の前に立ち、善であれ悪であれ、めいめい体を住みかとしていたときに行ったことに応じて、報いを受けねばならないからです。”

⁹ ローマ書11・30 “あなたがたは、かつては神に不従順でしたが、今は彼らの不従順によって憐れみを受けています。”

¹⁰ ローマ書6・20～22 “あなたがたは、罪の奴隷であったときは、義に対しては自由の身でした。では、そのころ、どんな実りがありましたか。あなたがたが今では恥ずかしいと思うものです。それらの行き着くところは、死にほかならない。あなたがたは、今は罪から解放されて神の奴隷となり、聖なる生活の実を結んでいます。行き着くところは、永遠の命です。”

¹¹ ローマ書5・9 “それで今や、わたしたちはキリストの血によって義とされたのですから、キリストによって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。”

¹² ローマ書7・6 “しかし今は、わたしたちは、自分を縛っていた律法に対して死んだ者となり、律法から解放されています。その結果、文字に従う古い生き方ではなく、“霊”に従う新しい生き方で仕えるようになっているのです。”

¹³ ローマ書8・1 “従って、今や、キリスト・イエスに結ばれている者は、罪に定められることはありません。”

によって人間が、今はどのような存在になっているか、**新しい存在となっていることを開示する。**

→説教は、水から新しいわざを引き出す洗礼に似ている。

まだ見えるものとなっていないものを垣間見せるわざ。

だから、そのような**新しき存在を造り出すという、新しき創造をなす**大いなる現臨、小さな群れの中にある大いなる現臨のゆえに喜びの声をあげながら、新しい生の覆いをとってみせること、それが説教。

現状の説教の問題点

① 説教者が救いの状況を捕らえ損ねている。

残念なことに説教者は、ぴくぴくしながら語るよりほかない。多くの説教者達が語る説教では、自分達の酷い体験とそれ故、よりよい態度を自他に対してとれなくなっているか、ということであり、

キリストの救いの御業が抽象化されてしまっている。「深刻な時代分析しつつも、キリストにおいて過ぎ去ったものとキリストにおいて現在のものとなっているものとを弁えること」ができておらず、キリストにあって過ぎ去った筈の古い自他に尚も囚われているが故に、時代に適切な説教ができていない。今働いておられる主を喜ぶ代わりに、律法主義に支配され、完全主義からの不安が現在を規定して、大いなるものを捕らえ損ねている。疑問が多い幼児洗礼の実施がそのような現状の説教がもたらした帰結である、という説教学的分析もできるであろう。**教会生活の中に、新しい存在を示す手がかり、その“しるし”が、見いだせず、説教が「高い頭脳が生み出したもの」(主の現臨による救いが産み出す生きた説教者の言葉ではなく、机上の論理として考えられたもの)としか感じ取られていない。**このような説教の例として、「洗礼の意味を成人の洗礼をモデルとして示そうとする説教」があげられるだろう。

② 救いが私的なものとなっている

このような状況は、キリスト教界が、「第二の悔い改め」という問題をもはや知らず、一般的に教会戒規も行わなくなっている、という処にも原因がある。**目に見えてくる罪を認めないところでは、その罪が過ぎ去った、と言ってみても、理屈に合わなくなる。**

制度として定められた秘密の告解の台頭以来、罪は私的なものと

なり、その傾向は、プロテスタンティズムにおいて告解制度が排除されて、尚強くなった。その結果、**救いの現臨もまた、私的なものとなった**。救いの現臨を語ろうとすれば、熱狂主義者の疑いをかけられるようになった。

新しい存在を説く説教の必要性

社会的存在としての人間も、新しき創造においてこそはじめて正しく社会的であり続けるのだ。キリストは、教会として現実に存在されるのであり(第17章IV節参照)、教会は「天にまで挙げられた方」の社会的存在として、現実に存在する。新しい個人(罪赦された個人)の存在は、教会の新しい存在から孤立させることはできない。それは、人間が個人として呼びかけられないというのではなく、個人で呼びかけられるだけでは、不十分である、人間の新しい存在が論じられる必要があり、それは、キリストが現臨される教会においてしか為され得ない、ということ。**人間が自分で自分の罪を赦し、自身の救いを持たぬままでは、つまり、自身の自己同一性(福音によって救われているという新しい自分との同一性の意識)を失っているこの世界では、罪の赦しが起こる説教—つまり、「天にまで高められた方を、新しい自我として語る説教、そして、それぞれに「自分に欠けているのは何か」をつきつけるような説教が必要となる。**

新しい自我を説く説教は、ジャン・コクトーの次の叫び

「わたしが存在するのだ、という信仰をわたしに吹き込んでくれ」という叫びに応える説教。

「個人の实存を教会の中にある“新しい存在”として発見する」説教が、このコクトーの叫びに応え得る。そうではなくて、「個人の实存をただ教会に加算していくだけの説教」は、コクトーの願いに個人の決断を呼びかけることにひとしく、十分な説得力を持ち得ない。

二つの説教例において説明

(1) コールブリュゲ¹⁴の説教

(長所)

キリストの時代と我らの時代を敢えて同時とし、教会に新しい存在を開示するのが強みの一つ(第5章第IV節参照)。ローマン主義の用語を使っているが、極めて大胆に人間の実存を王座にまで挙げられた方と結び付け、新しい現在を発見。

(短所)

福音の使信が、私的に理解される。「教会の栄光」は語られているが、抽象化されている。「わたし」とは言うが、「わたしたち」とは言わない。教会を代表しての「わたし」かもしれないが、説教全体は、教会を“まとめて”語っている。説教者は教会について語り、個人に呼び掛けるが、教会全体に呼び掛けることはない。教会は意識されていない。教会と個々の魂が並列になっている点に、大きな問題が潜む。

(コールブリュゲの説教分析の結論)

コールブリュゲの説教は、新しい実存の提示として、今日の時代にふさわしく、必然的なもの。この新しい実存は、個人を私人化することなく、御自身の教会におられる、高く挙げられた方の社会的存在の中に入るべきものであることを指し示す。新しい実存とは、個別化して語りかけるようなものではない、寧ろ、新しい個体は、あたらしい人類との分離し難い結びつきの中でこそ、宣べ伝えられるべきもの。新しい自我は、全体の部分として告げられる。自身が含まれる“新しい人類”に対する信仰があってこそ、「私は存在するのだ」という信仰が個々に与えられる。コクトーのように、自分自身に疑いを抱く同時代人に対して、「あらゆる疑いを高く超える新しい自我」が宣べ伝えられねばならない。それは自分勝手に振舞う事ではなく、自分の外に、あたらしい自我を見いだすこと、自己発見ではなく、神の啓示である。

だが、ここで、神の啓示をあたかも“自分で自分を見いだす自己発見”の如く説教されたとしたら、その説教は、決断を呼び求めるだけの律法主義的なものに落ち込み、コクトーの願いにこたえることはできない。

(2) ゴーガルデン¹⁵の説教 上記の例としてコリント

¹⁴ 第5章 名 第IV節 “コールブリュゲ論”での渡邊のメモによると、コールブリュゲは、19世紀のドイツの説教者であり、ヴッパータールの教会の棒k者。オランダ改革派の教会を創立した人。

¹⁵ フリードリッヒ ゴーガルデン Friedrich Gogarten 1887.1.13 - 1967.10.16 ドイツの神学者。ゲッティンゲン大学教授。ドルトムント生まれ。牧師を経て、1927年イエーナ大学プロテスタント神学講師、'31年ブレスラウ大学、'35年にゲッティンゲン大学教授就任。最初は弁証法神学の「危機神学」の指導者として活躍、また一時はナチスのドイツ・キリスト者運動に同調直後に離反。以後、トレルチやドイツ観念論を批判、戦後はグリーゼバハやハイデッガーの影響を受け実存主義的神学を展開、世俗と真の信仰との両

Ⅱ5 章 17 節¹⁶の説教

ゴーガルデンの説教分析

まず、二つの道を呈示(i)色んな関係・状況・事物・この世が変わらねばならず、新しくならねばならない。そうすれば自分自身も変わるであろう。(ii) 先ず自分自身が変わらねばならない。そうすれば他のすべてのこともうまくいくようになるだろう…iiこそ、真理の道とされ勧めるために、キリスト論的証明がなされる。…イエスにおいては、「人間も新しくなるにはまず世界が新しくならねばならない、というのではなく、先ず人間が変わらねばならないのだ、と言う真理が、真剣に取り上げられているのです」。

第一の道は、通行不能となるので、第二の道が開かれていたのは本当に幸せ。これこそ、私たち人間の道、私たちの本性にかなう道、この道を行こうと決心する時のみ、我々は自分自身に立ち返り、初めて人間的生活を生きる。人間は、決意して自分自身を把握することの中に、現実的な生活を獲得するような存在だから。そのようにしてのみ、現実的でほんものの希望が、私どもの中に生き始める」―現実的な生は、既に新しい生であるのか、決意して自己自身を捕らえたのは、あたらしい人間であるのか。

この説教では、新しい創造とは人間の自己実現の一つの方法であって、主イエスはその手段にすぎず、しかも人間そのものは、見た処英雄的な冒険の中に自己を解消してしまうように思える。

ゴーガルデンは、人間が自己自身の変革者になりうるかのような誤解を防ぐ必要があるので、次のように語る。「私自身の把握がどんなに大切であっても、やはり決定的なのは、私が既に捕らえられているということでもあります」

ゴーガルデンは、この説教で、「新しい人間とは、既に決意をし、自己自身に立ち返った者である」との印象を与えているが、あたらしい創造への道のりとなる「受肉者(キリスト・イエス)との出会いの前提条件は、『現実の人間となる』という冒険をすることだ」と語っている事となる。

「新しき存在は、神によって開示された可能性であって、今や、人間によってこれを実現すべく呼びかけられる。人間は、『決意して』自分自身を捕らえるべきである」という説教は、今日でも常套句のようになっている。

(3) ペーター・シュトゥールマッハー¹⁷の説教

立関係を求めた。著書に「われは三位一体の神を信ず」(’26年)、「政治的倫理」(’32年)。2014年の講演会で、佐藤優氏は次のように語る。「信仰は決断ではない。人間の決断など大きな力、危機の前にはぼろぼろになる。決断を元に信仰や神学を組み立てた20世紀の神学者F・ゴーガルデンはそこからナチス・ドイツのイデオロギーに取り込まれていった。むしろ、信仰は”伝染””伝播”だ。ペトロもパウロもイエス・キリストの生き方が伝染し、それにより生き方が変わった。キリスト者として、与えられたそれぞれの場でそれぞれの課題に向き合い生きることが大切だ」

¹⁶ コリントⅡ5・17「だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。」

¹⁷ ペーター・シュトゥールマッハー(ドイツ語: Peter Stuhlmacher、1932年1月18日 - 2025年4月5日)は、ドイツの福音主義(ルター派)神学者、新約聖書学者。1972年から2000年までテュービンゲン大学福音主義神学部新約聖書学教授として在任した。シュトゥールマッハーが提起する聖書神学という概念は学問的聖書解釈を霊的聖書解釈によって補うことである。シュトゥールマッハーにとって、聖書解釈、福音主義教会と宣教は密接につながって存在している。例えば、初代教会のキリスト者たちを模範とした教会に

(ゴーガルデンの説教をただす意味で挙げられている)
パウロが新しい創造ということで、「現実的な新しい創造」を言っているとすれば——「それは聖霊があらかじめ与えられているということに基づくものであり、その歴史的なあゆみを通じて、神に対して、肉体をもって頌栄をささげる修練をしなければならないのだ。この頌栄は、この世界がその本来の創造者のものであることを、それ自身しるしとして、他者に代わって承認し始めるものなのだ。」——その場合こそ、ゴーガルデンの言葉によれば、「私どもがキリストの内にあって存在するということを、…条件とし、前提とし」ている。

パウロに従えば、ただただ「聖霊の賜物」であるものが、ゴーガルデンでは、人間に要請されるべきものへと転化されている。新しい創造の福音が、律法主義化される。律法主義化は、内面化と個別化と結びつき、人間が先ず新しくなれば、「他のすべてのものが全くおのずから順調に行くようになる」という信頼によって明瞭に言い表される。ここでは、人間が個別的であると同時に社会的な存在であることが、無視されている。

コールブリュゲは、一種の静寂主義の危険がある。一方、ゴーガルデンは、イデオロギー批判的ではあるが、「ここには一種の国家主義的保守性をもった、ブルジョアのイデオロギーが語られているのではないか。それが社会的諸関係の革命・変革をはじめから拒否しており、現存するものを固定化し、その結果、福音の使信を個別化しているのではなかろうか。ボンヘッファーは安価な恵みについて語るのだが、この私人的な事柄に固執する決断が重視される処では、「安価な決断」について語っているのかもしれない。人間が新しくなった後はには、「他のすべてのものが全くおのずから順調にゆく」などと保証すれば猶更である。そういう約束がどれほど幻想的であるか、多くの説教者はそのような約束をすることを放棄している。

このような説教は、ジャン・コクトーのように「わたしが存在するのだ、という信仰を私に吹き込んでくれ」と助けを求める声に対して、「決意して自分自身を把握することの中に現実的生活を獲得するような」存在として人間を語る文章は、効果的な働きをするかもしれない。だが、福音的ではない。

よる熱心な導きを彼は支持した。最古の共同体形態として家庭集会を強く推奨し、新約聖書の中心的主題として宣教を強調している。このような信念に基づいて、シュトゥールマッハーは福音主義教会内の敬虔主義者グループである生ける信徒共同体との結びつきを強めている。